

平成30年度「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)自動走行システム/大規模実証実験」のうち、
自動走行システムに関する将来ニーズとそれによる課題分析・調査
実施報告書（概要版）

平成31年2月28日

住商アビーム自動車総合研究所



目次

1. 市民ダイアログ事業の背景と目的
2. 調査の構成
3. 開催実績
4. 今年度の市民ダイアログの特徴
5. 市民の声から得られた気づき・意見
 1. 小豆島におけるダイアログ内容の分析
 2. グラフィックレコーディングによるダイアログ内容の見える化
6. 社会受容性醸成の効果
 1. 定量面：アンケート結果からみえた成果
 2. 定性面：メディアを通じた情報発信
7. 総括

1. 市民ダイアログ事業の背景と目的

背景

■ 自動走行システムの社会実装を見据えた、社会受容性の醸成活動

自動走行システムを一般社会に展開していく上で、社会受容性の醸成は必要不可欠であり、市民参加型の自動走行システムに関する地域イベント等を開催し、既に実現されている自律型及び協調型の運転支援システムに関する技術や効果の理解活動を行うことは有用である

そこで得られた意見や反応を基に、これらの受容性醸成の活動を評価し、その効果を定量的に検証し、社会受容性の更なる醸成に繋げることは重要である

■ 過去の市民ダイアログで明らかになった課題への対応

これまでの市民ダイアログにおける議論、意見交換の結果、更なる自動走行システムに関する将来ニーズとそれによる課題分析・調査が必要であることが明らかになった

<課題① 地方における課題の抽出>

首都圏の特に都心に関しては公共交通網が発達しており、通勤等の移動に関する課題はあるものの、公共交通網が発達していない地域において、より根深い課題感を持たれている方が多いということが明らかとなった

<課題② 自動運転に関する正確な情報発信の必要性>

また、依然として混合交通への不安があるため、自動運転への過信、誤信を与えないように、自動運転に対する過信、不信を払拭し正確な理解を得ることが自動走行システムの普及には必要と考えられる

目的

■ 自動運転に対する社会受容性の更なる醸成

自動走行実用化の効用と潜在的リスクのオープンな議論の材料を一般市民に提供するとともに、参加型の議論を通じた社会受容性の醸成活動を実施することで、社会受容性の更なる醸成に繋げる

2. 調査の構成

- 双方向コミュニケーションの場「市民ダイアログ」を開催し、市民との対話を通じて、将来ニーズ等を抽出、分析し、新たな気づき等について検討した。
- 開催内容・成果をメディアやSIP-adusウェブサイト等を通じて発信し、正確かつ効果的な情報発信を行った。

調査 目標

- 自動運転への過信・誤信を防ぎ“安全”“安心”な自動運転の実装のため、様々な市民が抱える自動運転への不安を取り除き、正しい理解を深める機会の創出
- ダイアログを通じて得た意見から、新たな気づきやビジョン等を整理・分析し、それを今後の研究開発活動にどのように反映すべきか、示唆を整理

調査内容

- 自動走行実用化の効用と潜在的リスクに関する調査
 - ・ 一般市民や事業者・専門家等との議論を通じて以下の点を明確化
 - ✓ 自動運転車が実用化された際の一般市民への利点
 - ✓ 社会が潜在的に抱えるリスクや様々な制約条件（技術の限界、法的な側面等）等
- 双方向コミュニケーションの場の構築・運営
 - ・ ダイアログ形式のミーティング及び自動運転車の安心・安全に関するシンポジウムを企画・準備・開催
 - ・ 具体的な議論をまとめてポイントを整理

調査方法

- 課題を抱える地域での市民ダイアログの実施
 - ・ 自動運転利活用について議論を行うダイアログ形式のミーティング実施
 - ・ 中山間地域や公共交通網の整備がされていない地域等に着眼
- 安全・安心に関するシンポジウムの開催
 - ・ 自動運転に関する不安を取り除き、正しい理解を深めるため、自動運転車の安全・安心に関するシンポジウムを実施

情報発信

- 一般社会への正確な情報発信や更なる情報伝搬の促進
 - ・ 市民ダイアログ開催後に要点を整理した資料を作成、ウェブサイトに掲載
 - ・ イベント当日の様子をビデオ撮影し、ダイジェスト版を編集、ウェブサイトに掲載
 - ・ イベント成果をマスメディア等に情報提供
 - ・ 市民ダイアログに参加したパネリスト、および一般聴衆を通じた情報提供・発信

3. 開催実績

	第1回 シンポジウム	市民ダイアログ	第2回 シンポジウム
日時	2018年10月7日（日） 10:00～12:00	2018年12月4日（火） 12:00～15:00	2019年2月6日（水） 17:30～19:30
場所	国際研究交流大学村 東京国際交流館	香川県立小豆島中央高等学校	東京・有明 TFTホール300
テーマ	あなたと考える自動運転の安心・安全	日本の未来図 小豆島 ～地域で創るモビリティサービス～	自動運転の安心・安全について ～一緒に考えよう 未来社会の安心・安全～
目的・ねらい	自動運転の安心・安全に関する国の取組み状況等についての正確な情報発信、及び議論	地域住民を交えた、モビリティに関する課題・ニーズの共有、自動運転への期待・不安等の議論	自動運転の安心・安全に関する国の取組み状況等についての正確な情報発信、及び議論
モデレーター・司会	清水和夫氏 SIP-adus 推進委員会構成員 岩貞るみこ氏 SIP-adus 推進委員会構成員	岩貞るみこ氏 SIP-adus 推進委員会構成員	清水和夫氏 SIP-adus 推進委員会構成員 岩貞るみこ氏 SIP-adus 推進委員会構成員
登壇者・参加者	葛巻 清吾氏 SIP-adusプログラムディレクター 有本 建男氏 SIP-adusサブ・プログラムディレクター 平澤 崇裕氏 国土交通省 自動車局 技術政策課 自動運転戦略室長 杉 俊弘氏 警察庁 交通局 交通企画課 自動運転企画室長 横山 利夫氏 日本自動車工業会 自動運転検討会主査 中川 由賀氏 中京大学 専門教授 ポンサートン ラクシンチャーンサク氏 東京農工大学 准教授	【SIP関係者】 葛巻 清吾氏 / 有本 建男氏 清水 和夫氏 / 岩貞 るみこ氏 【地域のみなさま】（計16名） 老人クラブ / 婦人会 / 教育関係者 物流事業者 / 福祉事業者 観光事業者・子育て世代（2名） 交通事業者（5名） / 地場産業事業者 高校生 / 移住者・子育て世代 自動車サービス事業者・青年団体	葛巻 清吾氏 SIP-adusプログラムディレクター 有本 建男氏 SIP-adusサブ・プログラムディレクター 平澤 崇裕氏 国土交通省 自動車局 技術政策課 自動運転戦略室長 杉 俊弘氏 警察庁 交通局 交通企画課 自動運転企画室長 中川 由賀氏 中京大学 専門教授
来場者、アンケート	■ 事前登録：431名 ■ 当日来場：194名 ■ アンケート回答数：158件（回収率81.4%）	クローズド・イベントのため事前公募による来場者なし	■ 事前登録：291名 ■ 当日来場：167名 ■ アンケート回答数：138件（82.6%）
メディア掲載実績	5件（読売新聞、日刊自動車新聞、交通毎日新聞、レスポンス、ReVision Auto&Mobility）	4件（NHK 高松放送局ゆう6かがわ、香川NEWS WEB、四国新聞朝刊、ビジネス香川web版、ReVision Auto&Mobility）	1件（ReVision Auto&Mobility）

4. 今年度の市民ダイアログの特徴

	シンポジウム	市民ダイアログ
主 な 特 徴	<p>① 多くの市民に向けた情報発信のためのシンポジウム開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ より多様かつ多くの市民に自動運転の理解等を深めてもらうため、関連イベントにてシンポジウムを同時開催 ✓ 第1回目は「東京モーターフェス2018」にて実施。事前登録431名に対し、当日の来場は194名であった ✓ 第2回目はSIP-adusの情報発信事業の一環として開催。会場は当初100名で設計していたが、応募多数の為、会場内の設定を変更。167名が来場した 	<p>③ 市民ダイアログ初の地方開催を実現</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ これまでの市民ダイアログは東京で開催されてきたが、今年度は香川県の小豆島で地方初開催を実現 ✓ 交通課題に直面する地方で開催することで、自動運転の実装に向けた課題等を抽出することが目的 ✓ 市民ダイアログ開催当日のうちにNHK高松放送局のニュースに取り上げられるなど、現地の注目度が非常に高く、情報発信効果も高いものとなった
	<p>② 自動運転の「安心・安全」がテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 自動運転の社会受容性の醸成に向け、技術開発とあわせて整備が必要となる法律やルールといった新しい制度や社会的枠組みを意識したテーマ設定 ✓ こういった制度は、市民の安心・安全を担保するものであり、正確な情報発信による市民の理解の深化、自動運転の安心・安全に対する取組みに関心を持ってもらうことが、自動運転の実現に向けた社会受容性の醸成には重要である。 	<p>④ 対話を活発にすることを可能とするグラフィックレコーディングの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 市民ダイアログでは平成29年度から導入したグラフィックレコーディングを実施 ✓ ダイアログの記録方法は様々あるが、グラフィックレコーディングはその場ですぐに共有できることが特徴 ✓ 今回は高校生や老人クラブの方、事業者の方等、多様な属性の市民が集まったが、ダイアログ内容の見える化により、参加者の理解が深化した

5. 市民の声から得られた気づき・意見

5-1. 小豆島におけるダイアログ内容の分析

- この度の市民ダイアログでは、「**人を中心とした自動運転社会の実現**」を期待する声と「**データ活用による地域サービスの実現を期待する未来志向**」の意見が出されました。

市民の声から得られた主な気づき・意見

【人を中心とした自動運転社会の実現】

- 自動運転の活用が、元気な高齢者等が活躍できるようになるといった、人の可能性を広げていくことに繋がることを期待
 - 自動運転車は運転が必要なく、事故リスクも減るので、高齢者の社会参画の促進等に繋がることを期待
- 人を中心とした自動運転社会の実現への期待
 - 自動運転プラス“人”を志向。観光、物流、移動販売、高齢者の移動支援等において、サービスに携わる人が必要と認識されている
 - 「機械だけでは成り立たず、人が常に中心で助け合う必要がある」、「AIが導入されても利用者が共感できるシステムであるべき」といった、技術開発が進んでも、人を中心とした自動運転の実現を期待

【データ活用による地域サービスの実現を期待する未来志向】

- データを活用することで地域の住民が望むサービスが実現していけるのではないかという未来志向の意見
 - 「多様なデータを共有し、連携することで、小豆島の人々が望むサービスを提供できるようになる」、「データを活用し、小豆島の独自の物差しで小豆島の元気を測り、モビリティサービスを考えていきたい」といった、データ活用による地域のニーズにあったモビリティ・サービスの実現を期待

5. 市民の声から得られた気づき・意見

5-1. 小豆島におけるダイアログ内容の分析

- ダイアログは「移動に関する課題・ニーズの共有」と「これからのモビリティのあり方、自動運転の活用」の2部構成で開催。
- 前半の第一部では、地域の皆様と地方ならではの移動に関する多様な課題やニーズ等を抽出した。

移動・交通に関する現状の課題

- 90歳を超えても自家用車を運転する人が少なくない。買い物も高齢者同士が乗り合わせている事例が多く、危険を感じる
- 島内の移動距離が長いだけでなく、運行ダイヤの兼ね合いもあって通学時間が長い生徒がいる。通学時間を勉強や部活など、もっと有効活用させてあげたい
- 公共交通では、利用者の満足度は十分ではないだろう。保有台数には限りがあり、繁忙期は待たせたり乗り切れなかったりすることもある
- 子育て世代は子どもの送迎がある。社員に残業や研修をお願いしても「子どもの送迎があって難しい」というケースがある。社員の成長に繋がる機会だが、送迎をしないわけにはいかない
- また、子どもに習い事をさせたくても、送迎ができず諦めるケースがある。親の都合で子どもの芽を摘むことになり兼ねない
- インバウンドの対応に苦労している。運転手が通訳アプリを使うなど工夫しているが通じないこともあるし、手間がかかる
- 船とバスの運行ダイヤがスムーズに連携できていない

将来への不安

- 高齢者はバスだと買い物した荷物を持って乗り降りするが大変
- 物流を担うドライバーの確保が大きな課題
- 乗り合いタクシーは満員ならひとりの支払いが安くて便利だが、いつも満員になるとは限らない。人数不足のとき、足りない料金は誰が払うのか
- 障がい者向け等のサービスでは、乗降支援が必要なので無人の自動運転車では対応出来ない。運転手以外の方が乗降支援する場合は、いまの保険では事故対応できないのでは

移動・交通に関するニーズ・期待

- デマンド型の乗り合いタクシーは高齢者や障がい者にニーズ有
- 路線バスの利用に関するデータがあると良い。乗降区間や移動目的がデータで分かればスムーズに運行管理ができるのでは
- 自動運転になれば我々が車で移動するだけでなく、車がモノやサービスを自宅付近まで持ってくることも考えられる
- 移動販売を提供しているが、日によって欲しい商品は変わるので事前に注文データを送ることで利便性が増すのではないかと

5. 市民の声から得られた気づき・意見

5-1. 小豆島におけるダイアログ内容の分析

- ダイアログは「移動に関する課題・ニーズの共有」と「これからのモビリティのあり方、自動運転の活用」の2部構成で開催。
- 第二部では、将来の移動手段のあり方や自動運転をどう活かされるか等を議論し、自動運転への期待や課題を共有した。

より良い小豆島とは

- 人情味や景観の良さが小豆島の魅力。人づくりが重要。人と人の繋がりや信頼関係から新たなサービスが生まれれば良い
- 若い人達が小豆島を出ても帰ってきてくれる島になってほしい
- お年寄りが安心して一人暮らしが出来る島であってほしい
- コミュニティとしては商店街のシャッター街化も課題
- 小豆島の良いところは子どもたちを近所の方々がよく見ていてくださること

自動運転導入への不安・課題

- 交通事業者としては、採算より安全が第一。人が運転するより安全であるなら、自動運転には大いに期待する
- バス運転手は道幅を見ながらうまく追い越しできるが、自動運転車にそういった対応が出来るのか疑問
- 高齢者は新しい機器や仕組みに順応するのが難しい。内装を昭和風にする等、誰でも親しみやすい環境づくりも大切
- 高齢者は乗降支援が必要なことが多い。無人走行車の場合、怪我のリスクが懸念される

これからの移動手段のあり方、自動運転の活用

- 自動運転プラス“人”で考えていくべき。観光にしても、物流にしても、移動販売にしても、高齢者の移動支援にしても、サービスに携わる人が必要
- 自動運転車は運転が必要なく、事故リスクも減るので、高齢者や障がい者の社会参画の好機になり得る。働き方が柔軟になりそう
- 自動運転者に高齢者が乗って観光地を案内したり、車内で素麺を茹でて振る舞ったりする。そんな観光案内が可能になる
- 物流では、ハブ間だけでも自動運転を実現すればそこで浮いたリソースを他の部分に回すことが出来る
- キャッシュレス化が進めばもっと簡単に交通に関するデータを収集できるようになる
- 大画面の自動運転トラックがあると良い。ライブ映像が映し出されたら、そこがコミュニティの場になる。婦人会向けコンサートや子ども向けアニメ、バーベキューも良さそう
- 自動運転を活用した動く居酒屋があっても面白い。「今日はこの街に動く居酒屋が来るから集まろう」といった地域間交流が可能になるかもしれない

5. 市民の声から得られた意見・気づき

5-2. グラフィックレコーディングによるダイアログ内容の見える化

- 議論内容をその場でリアルタイムに視覚的に表現することで、多様な属性を持つダイアログ参加者の理解の深化を図った。



5. 市民の声から得られた意見・気づき

5-2. グラフィックレコーディングによるダイアログ内容の見える化

- 議論内容をその場でリアルタイムに視覚的に表現することで、多様な属性を持つダイアログ参加者の理解の深化を図った。



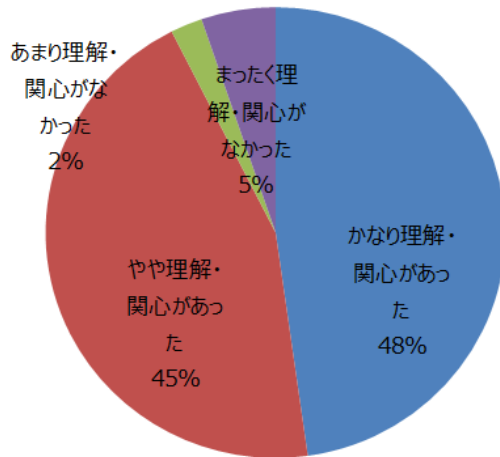
6. 社会受容性醸成の効果

6-1. 定量面：アンケート結果からみえた成果

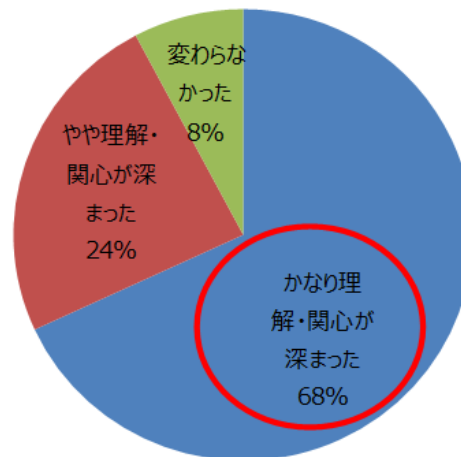
- 2019年2月のシンポジウムにおいては、アンケート回答者の約7割が、自動運転の実現・普及に向けたSIPの取組みに対して、「かなり理解・関心が深まった」と回答し、本取組みが社会受容性の向上に寄与したことが明らかになった。
- 同様に、自動運転の実現に向けて、交通ルールや交通事故発生時の法的責任のあり方を変える必要があることについては、約半数の方が「参加前よりかなり理解できた」と回答し、自動運転の導入に向けた課題を認識できた機会になった。

Q. 「SIPの取組みに対するあなたの理解と関心について、ご来場前後の印象を教えてください。」

参加前

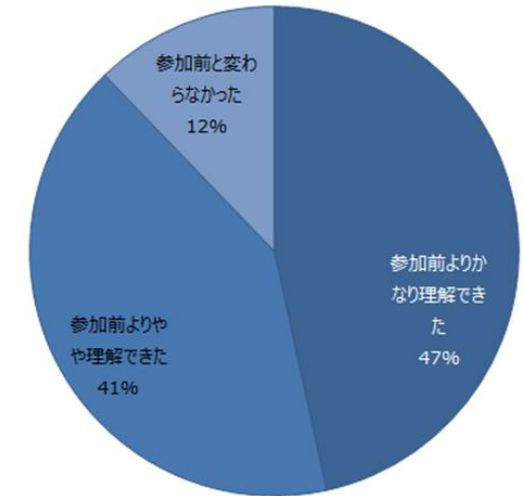


参加後



- ✓ 参加前は、「かなり理解・関心があった」が48%、次いで「やや理解・関心があった」が45%を占めた。
- ✓ 参加後、「かなり理解・関心が深まった」が7割程を占め、「やや理解・関心が深まった」は24%であった。

Q. 「自動運転の実現に向けて、交通ルールや交通事故発生時の法的責任のあり方を変える必要があることを、シンポジウム参加前より理解できましたか。」



- ✓ 「参加前よりかなり理解できた」が47%、次いで「参加前よりやや理解できた」が41%となった。

*その他のアンケート分析結果は実施報告書本文に記載

6. 社会受容性醸成の効果

6-2. 定性面：メディアを通じた情報発信

- 小豆島における市民ダイアログ開催は、当日のうちにNHK高松放送局のニュースに取り上げられるなど、現地での注目度が非常に高く、情報発信効果も高いものとなった
- 10月に開催したシンポジウムは、読売新聞の全国版（約700万部）に掲載され、社会に向けた大きなアピールとなった。

NHK

自動運転 住民の意見聞く集会

12月04日 17時38分



地域が抱える交通手段の課題や要望に、自動運転をどう生かしていけばいいか住民から意見を聞く集会が、4日、香川県小豆島で開催されました。

この集会は自動運転の開発を進める内閣府が3年前から開いているもので4日、香川県小豆島町で開かれた集会には、内閣府の担当者や住民など、20人が参加しました。

集会では、地域が抱える交通手段の課題や要望に自動運転をどう生かすことができるか住民が意見を申し出ました。

この中では、観光地の小豆島では、通学で利用するバスが観光客で混雑して困ることがあるといった課題や自動運転で送迎や移動販売ができれば生活が便利になるなどといった意見が出ていました。

内閣府では、こうした集会を全国各地で開催し、集まった意見を今後の自動運転の研究開発にいかしていきたいとしています。

参加した高校生は「自動運転の実現でバスの便が増えるなど地域の交通がもっと乗りやすく便利になってほしい」と話していました。

内閣府のくず※巻清吾プログラムディレクターは「地方では車が生活必需品で、その中で自動運転をどう生かしていくか議論ができて有意義だった。こうした意見を取り入れ要望を実現させていきたい」と話していました。

出所：NHK（高松放送局ゆう6かがわ、香川 News Web）（12/4付）

読売新聞

戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)自動走行システムシンポジウム

「あなたと考える自動運転の安心・安全」



内閣府が主導する戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)の一つである「自動走行システム」は、10月7日、東京国際交流館(東京都江東区)で、東京モーターフェス2018の併催イベントとしてシンポジウムを開催した。今回のシンポジウムは、「あなたと考える自動運転の安心・安全」をテーマに、自動運転の更なる社会受容性の醸成に向け、市民の理解向上を目的として実施されたもので、自動運転の技術

や関連の法規制等、国土交通省や警察庁、日本自動車工業会、大学・研究機関の各方面で安心・安全について取り組む専門家がパネルディスカッションを行い、「自動運転はどれだけ安全でなければならないか」、「自動運転の事故の責任問題」、「自動運転の国際連携」等に関して議論を行った。

シンポジウム前半は登壇者によるプレゼンテーション。プログラムディレクターの葛巻清吾氏はSIP自動走行システムの活動内容を、国土交通省の平澤崇裕氏、警察庁の杉俊弘氏、日本自動車工業会の横山利夫氏もそれぞれの組織における自動運転の取り組みを紹介した。また、東京農工大学准教授のボンサトーン・ラクシンチャランサク氏は「ヒヤリハットデータベースを活用した予防安全の進化」について、中京大学専門教授で弁護士の中川由貴氏は「自動運転をめぐる法的責任」について発表。

後半はSIP自動走行システムの構成員で国際モータージャーナリストの清水氏のモデレートによるパネルディスカッション。前半で紹介された法的責任の問題や事故回避のためのシステム開発などについて改めて議論したほか、人間が自動運転システムを過信することによる事故のリスクも話題になった。また、会場からは消費者のコスト負担についての質問が上がり、多様な観点から意見交換がなされた。

出所：読売新聞 朝刊（11/24付）

6. 社会受容性醸成の効果

6-2. 定性面：メディアを通じた情報発信

- 小豆島の両町の役場が発行する広報誌に本取り組みが掲載され、開催地域の各世帯の皆様で紹介された。

小豆島町役場の広報誌「しょうどしま」



地 戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)自動走行システム市民ダイアログ 域で創るモビリティサービス

12月4日、小豆島中央高校において、内閣府が取り組む戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)の一つである自動走行システムへの理解と関心を深めることを目的として、初の地方開催となる「日本の未来図小豆島地域で創るモビリティサービス」をテーマとした市民ダイアログが開催されました。

住民や観光、交通事業者など約20人が参加し、移動に関する課題やニーズの共有、自動運転への期待や不安などについて、グループ討論などを行い、「小豆島独自のものさしでモビリティサービスを実現するために、各事業者がもっているデータを共有し、連携、活用することが必要ではないか」「小豆島の人や地域の絆の強さなどの良さを自動運転に活かし、人が共感できるシステムが創れるとよい。」など小豆島ならではの未来を考えた活発な意見が交わされました。



出所：小豆島町役場HP

土庄町役場の広報誌「広報とのしょう」



Town Topics

12/10 笠滝でじゃがいも収穫体験

土庄町地産地消推進協議会によるじゃがいも収穫体験が笠滝地区で行われ、土庄小学校1年生84名が参加しました。子どもたちは宝探しをするようにじゃがいもを探し、次々と見つけては「あったー!」と歓声をあげて収穫していました。笠滝を守る会の皆さんが愛情込めて育てたじゃがいもはまるまると大きく、子どもたちはお土産のじゃがいもを詰めた袋を持って「農家の皆さん、今日はありがとうございました」と笑顔で感謝を伝えていました。



12/4 自動走行システムの理解を深めました

内閣府が取り組む自動走行システムの理解を深めるため、「日本の未来図小豆島地域で創るモビリティサービス」をテーマにした市民ダイアログが開催されました。会場の小豆島中央高校には観光・交通事業者など約20名が参加し、自動運転への期待や移動に関する課題などを討論し、「小豆島の人や地域の魅力を自動運転に生かし、人が共感できるシステム創りに期待したい」など活発な意見が交わされました。



出所：土庄町役場HP

7. 総括

- 本年度のシンポジウムおよび市民ダイアログを通して得ることができた、今後の研究開発活動に向けた方向性を以下の通り整理した。

1. 社会受容性の醸成への取組みについて

- 自動運転の社会受容性の醸成には、技術の進歩とあわせ、法律やルールといった新しい制度や社会的枠組みを整備しながら、その理解を深めてもらうために、世の中に情報発信を継続することが重要
- 利用者側のニーズを吸い上げながらサービス化を図ることで、利用者にとっての価値が生まれ、利用が促進・拡大していき、更なる社会受容性の醸成に繋がっていくことが期待される
- 今後、自動運転に関心のない層に対して、どう自動運転の情報を提供していくか、検討していく必要がある

2. 地方での市民ダイアログ開催の意義

- 自動運転の実用化は、その地域の特性・ニーズに沿った利用者目線での取組みが求められる
- 各地域の住民の方々が主体的に将来のモビリティを考えていく機会を創出していくことで、移動サービスへの意識向上を図ることが可能となり、自動運転の社会受容性の醸成活動にも繋がっている
- データを活用することで、目に見えない地域らしさを可視化でき、地域独自のサービスとして展開していく事ができるようになるのではないか

3. 地方都市で開催する場合の運営について

- 地方都市にはその地域ならではのネットワークや人脈もあるため、地方都市で開催する際は、何度も現地に足を運び、関係各所に事前説明・相談し、市民ダイアログ活動への理解・協力を得ていくための入念な準備が必要不可欠
- 例えば、参加者の決定には、町役場への相談や住民への課題ヒアリングを行うなか、約2か月の期間を要した
- 参加者が意見を出しやすい環境を整えるため、ダイアログのファシリテータを現地の方に依頼し、準備する工夫も行った